

## 第93号正誤表

雑誌名	集刊東洋学
巻	93
発行年	2005-10-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00132613">http://hdl.handle.net/10097/00132613</a>

めようとしていたのか、また同時期に行われた諸制度の改革、とくに宦官・技術官に関する官制改革は、それとどのようにつながっていたのか、という点について考証を行う。それにより、実際には蔡京の失脚は、単純に宦官勢力との争いに敗れたためとは言えないということを論じてみたい。

### 史彌遠専権体制における内廷勢力

北海道大学大学院文学研究科 小林 晃

史彌遠（一一六四～一二三三）は寧宗朝後期（一二〇八～一二二四）から理宗朝前期（一二二四～一二三三）にかけて、宰相として二十六年にも及ぶ長期的な専権を行使した人物として知られている。史彌遠の専権は宋代を通じて最長のものであり、南宋政治史を考察する上できわめて重要な意義を有しているにもかかわらず、その専権についての考察はこれまで十分になされてこなかったように思われる。本報告の目的は、こうした重要性を有する史彌遠の専権について、専権の確立、及びその長期的な維持を可能にさせた要因を考察することにある。

先行研究では長期的な専権を史彌遠が行使しえた原因として、史彌遠が彼の出身地である明州（慶元府）や、有力・名門宗族を背景にしていたこと、出先関係機関や現場担当者に直接指令を与える独特な政治手法を多用したことなど、いくつかの示唆に富む視点が示されている。本報告が特に注目したいのは、史彌遠専権に論及する多くの研究において、史彌遠と寧宗皇后楊氏、そして皇太子趙詢（後の景献太子）という三者の関係が、その専権確立に大きく寄与したとされている点である。また史彌遠専権の後期である理宗朝前期においても、同じく史彌遠と

寧宗皇后（当時は皇太后）楊氏との関係が重要であったとされている。これらの指摘は、宮廷内で生活する皇后や皇太后、皇太子などの皇帝の近親者層（本報告では便宜上「内廷勢力」と呼称）が、史彌遠専権体制の確立・維持に大きな役割を果たしていたことを示唆している。この問題はきわめて重要であると考えられるにもかかわらず、従来は詳細な分析がなされてこなかった。本報告ではこうした内廷勢力が史彌遠専権において有した重要性を、史彌遠専権の確立過程や理宗擁立過程などの当時の重要な政治事件を中心に考察し、史彌遠専権体制の一面面を明らかにすることを目指す。

93号正誤表

102	65	33	33	頁
下	下	上	上	段
2	18	14	9	行
裴藻				誤
三句目から七句目 四・五句目 続蔵一・三四				
呉（竹・均）				正
二句目から六句目 三・四句目 続蔵一・四三				